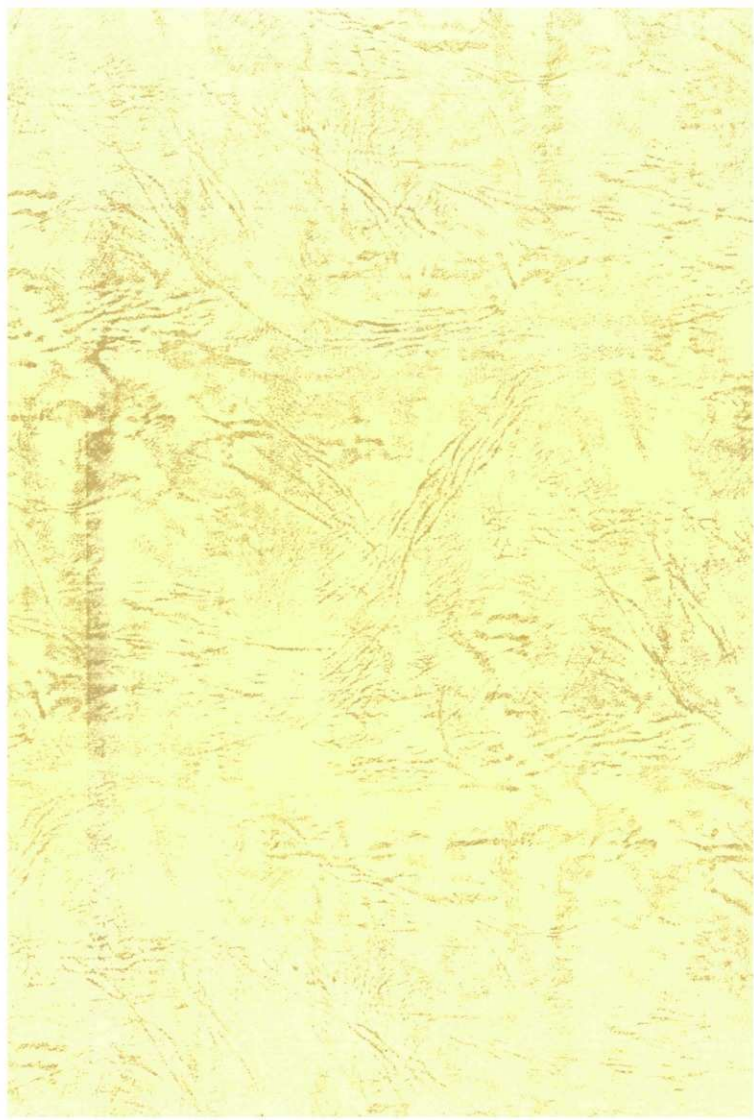


—平成 20 年度町道中島井ノ口線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

# 南田原条里遺跡 (第 10 次)

2009年 3 月

兵庫県神崎郡  
福崎町教育委員会



—平成 20 年度町道中島井ノ口線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告—

# 南田原条里遺跡 (第 10 次)

2009年 3 月

兵庫県神崎郡  
福崎町教育委員会

## あ い さ つ

町道中島井ノ口線の工事に先立ち、確認調査を実施した結果、遺跡内に明確な遺構が存在することがわかりました。

福崎町において本格的な全面調査に移行するのは数年ぶりのことであり、そこから新たな歴史を見つけ出すことが出来ればと思います。調査の状況を現地説明会という形で実施したところ地元の方々をはじめ、近隣の方々にお越しいただき関心が高いことがわかりました。

ここで得られた成果は今後の活用という形で多くの方々に還元できればと思います。

調査にあたり、工事関係者の方々の理解と共に地元自治会等にご協力を得ました。厚くお礼申し上げます。

平成 21 年 3 月

福崎町教育委員会  
福崎町教育長 岡本 裕

## 例 言

1. 本書は、平成 20 年度に行った、南田原糸里遺跡（第 10 次）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、福崎町の依頼を受け福崎町教育委員会が主体となり実施した。
3. 経費は確認調査に関しては国庫補助金で実施し、本調査は原因者負担により実施した。
4. 各年度の調査体制は以下の通りである。

平成 20 年度	平成 20 年度
調査事務局	整理事務局
教 育 長 岡本 裕	教 育 長 岡本 裕
社会教育課長 高井 紳一	社会教育課長 高井 紳一
社会教育課副課長 山下 健介	社会教育課副課長 山下 健介
社会教育係長 出田 直	社会教育係長 出田 直
調査担当 調査員 出田 直	

整理作業は、出田 直（福崎町教育委員会）が担当し、梶智美の補助を得た。

5. 挿図中に使用している方位は基本的に磁北を示している。
6. 本書の執筆、編集は出田が行った。
7. 遺構の実測は主に梶が行い、写真は出田が撮影した。遺物の実測・製図、遺構の製図等は梶の協力を得た。
8. 現地調査作業には下記の方の協力を得た。（順不同・敬称略）  
梶智美、西井正実、城井直孝、牛尾明正、牛尾秀麿、牛尾寿一、松岡正夫、長谷川義信、村上由希子、藤原清尚、吉識雅仁、中島区、生田建設株式会社、株式会社ワールド、福崎町まちづくり課
9. 整理作業等に関して下記の方の協力を得た。（順不同・敬称略）  
松本正信、加藤史朗、古谷裕、梶智美、村上由希子、谷川美喜代、牛尾善秀、兵庫県立人と自然の博物館、神崎郡歴史民俗資料館、福崎町産業課、福崎町まちづくり課

## 目 次

あいさつ・例言・・・・・・・・・・	I		3		遺物・・・・・・・・・・	7
目次・図版目次・写真目次・・・・・・・・	II		4		まとめ・・・・・・・・	7
第1章					第3章 平成20年度南田原条里遺跡発掘調査	8
第1節 調査にいたる経過	2				第1節 調査にいたる経過	8
第2節 南田原条里遺跡周辺の地理的環境	2				第2節 調査区概要	8
第3節 南田原条里遺跡周辺の歴史的環境	3				1 調査方法	8
第2章 確認調査					2 土層	10
第1節 調査の方法	6				3 遺構	10
第2節 確認調査概要	6				4 遺物	14
1 調査区	7				第4章 まとめ	28
2 遺構	7					

## 図 版 目 次

図1 福岡町位置図	1		図1 3 SX24 出土状況図		13
図2 調査場所位置図	1		図1 4 SD1 出土遺物		16
図3 道路計画図(部分)	2		図1 5 SD1 出土遺物		17
図4 調査区周辺地形図	3		図1 6 SD1 出土遺物		19
図5 調査区周辺の主要遺跡	4		図1 7 SD1 出土遺物		21
図6 調査区周辺の小字図	5		図1 8 SD1 出土遺物		22
図7 調査区配置図	6		図1 9 SD1 出土遺物		23
図8 調査区1, 2土層図	6		図2 0 SD1 出土遺物		24
図9 調査場所位置図	8		図2 1 SD1 出土遺物		25
図1 0 遺構配置図	9		図2 2 SD2 出土遺物		26
図1 1 南区 SD1, SD2, SD3 土層図	11		図2 3 SD3・SD16 出土遺物		26
図1 2 北区土層図	12		遺物観察表		28

## 写 真 目 次

写真1 調査区2出土遺物	7		図版8 北区 SD22, SD16
写真2 現地説明会風景	8		図版9 SX24, SD16, SK18, 19
図版 調査区遠景			図版1 0 SD1 遺物出土状況
図版1 南田原条里遺跡第9次調査			図版1 1～図版1 8
図版2 南田原条里遺跡第1 0次調査			SD1 出土遺物
遺跡遠景・遺構全景			図版1 9 SD3 出土遺物
図版3 調査前の状況・作業風景			図版2 0 SD2 出土遺物
図版4 作業風景			
図版5 南区遺構検出状況			
図版6 北区遺構検出状況			
図版7 南区 SD1, 2, 3, 南区掘立柱建物			

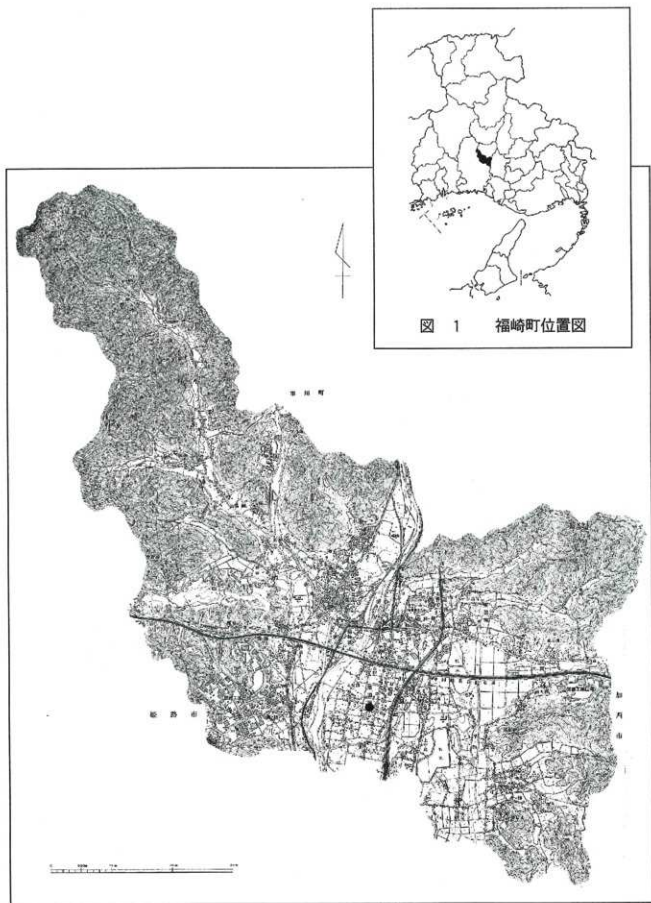


図 1 福崎町位置図

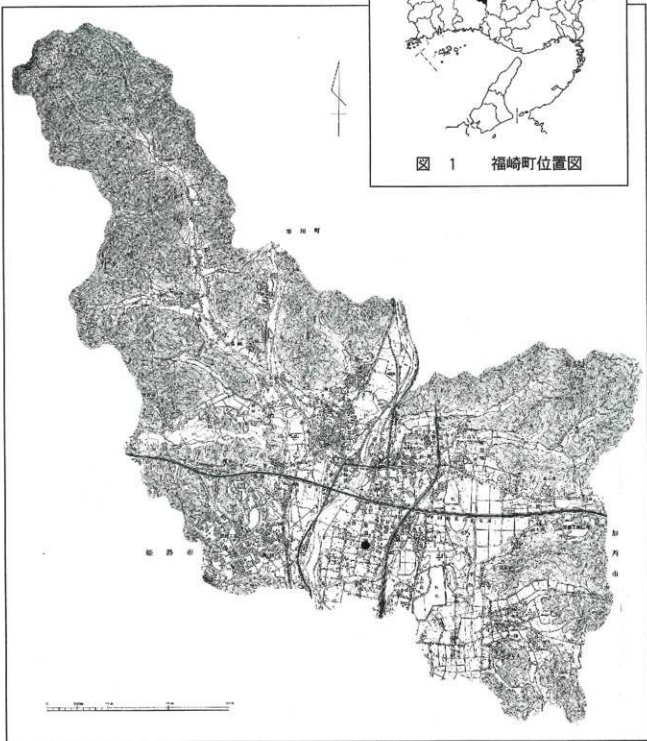


図 2 調査場所位置図

## 第1章

### 第1節 調査に至る経緯

平成19年度に町道中島井ノ口線建設に関わる協議が行われ、南田原条里遺跡に含まれることや周辺に五合堂などの建物があることから文化財調査の必要性を回答した。その結果、平成20年2月28日(木)に確認調査を実施し、遺構と遺物の確認を行った。

確認調査の成果によって、南田原条里遺跡内でも遺構が顕著に確認できる部分であり、道路によって遺構が削平されることと設計変更が出来ないことから、本調査を行う必要性が生じた。

それを受けて、道路建設の関係課(まちづくり課)との協議を経て、平成20年度に南田原条里遺跡の調査を実施し、合わせて資料整理も行い報告書作成を順次行った。

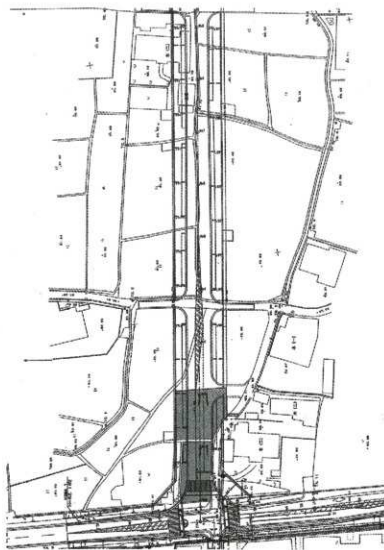


図3 道路計画図(部分)

### 第2節 南田原条里遺跡周辺の地理的環境

福岡町は市川の中流域に属し、川の東西には河岸段丘が発達していることが知られている。東岸には段丘面と平野部といえる低位氾濫原と称される水田部が広がる。(1)近年では、都市計画区域にあり都市化により多くの宅地が増え、ミニ開発といえる個人住宅や集合住宅の建設が見られる。

南田原条里遺跡は、高位氾濫原と低位氾濫原に区分される場所に水田が広がり、江戸時代からの集落が広がる場所は高位氾濫原といわれる微高地上に見られる。遺跡内には、灌漑用に用いられる小河川であるヤブ川や川すそ川などが見られる。

(1) 田中真吾「福岡町とその周辺の自然に関する資料」『福岡町史』第三巻資料編I 1990年 福岡町



図 4 調査区周辺地図

### 第3節 南田原条里遺跡周辺の歴史的環境

福崎町で見られる最古級の遺物は、河岸段丘上に位置する大門遺跡や上大明寺遺跡から旧石器が出土しており、当調査場所の北に中世が中心となる南田原桶川遺跡からも旧石器が出土している。(2) 南田原条里遺跡においては、確認調査が実施され、いくつかの地点からは遺物の出土が見られるが顕著な遺構が確認された例は少ない。いずれも低位氾濫原が調査対象になっており、南田原条里遺跡第7次調査は高位氾濫現に位置づけられる場所の調査であった。そこからは、明確な包含層が確認できていることと遺物の出土も顕著であった。時代も奈良時代から中世にかけての遺物が見られた。(3) 弥生時代の環濠集落と考えられる南田原長目遺跡は当調査区の南西の段丘面に位置し、一見して高位の場所にある遺跡ということが判る。(4) 隣接して姫路市ではあるが、播但連絡道の建設の際に調査された八幡遺跡の存在などから弥生時代中期から後期の集落遺跡が段丘面に見られる。

古墳時代の遺跡はあまり知られていないが、遺物としては八反田区公民館にある石棺と考えられるものの存在や、西光寺区にある宝生院の石棺などから古墳の存在が考えられてきた。それらにおいても、周辺の開発（中世以降）において古墳自体が削平されてしまった可能性も



考えられている。しかし、それに伴う集落遺跡も今のところ確認されていない。

奈良時代以降の遺跡としては、南田原条里遺跡内の高位氾濫原に位置する微高地部分に広がることが近年の確認調査によって判ってきた。明確には、南田原桶川遺跡の存在などから、小堂である寺院周辺にも遺構が広がることが確認されてきている。(5)



A: 調査場所

- |            |             |
|------------|-------------|
| 1 南田原条里遺跡  | 2 八反田公民館の石棺 |
| 3 南田原長目遺跡  | 4 南田原中野田遺跡  |
| 5 有舌尖頭器採集地 | 6 宝性院の石棺    |

図 5 調査区周辺の主要遺跡

- (2) 『南田原桶川遺跡』福崎町埋蔵文化財調査概要報告3 1999年3月 福崎町教育委員会  
 (3) 『平成17年度・平成18年度埋蔵文化財発掘調査報告』福崎町埋蔵文化財調査報告6  
 (4) 松本正信『福崎町の原始・古代・中世資料』『福崎町史』第3巻資料編Ⅰ 1990年 福崎町  
 (5) ただし、調査区の南に隣接する五合堂は移設されたもので、中に薬師如来を祭ることから、地元では「薬師」の名で親しまれる。元はこより東の字五合堂に祭られていたということである。

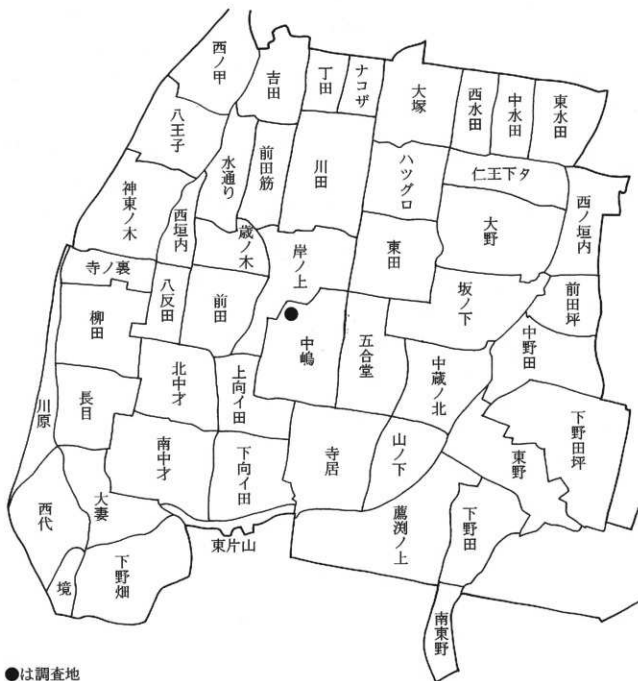


図 6 調査区周辺の小字図

## 第2章 確認調査

### 第1節 調査の方法

道路建設予定地は水田となっており、一部雑種地として利用されていた。平成19年度は、道路用地の買収が済んでいる部分の内、確認調査可能な場所に調査区を設定した。調査は、高位氾濫原、低位氾濫原に位置づけられる田に対して、1箇所ないし2箇所の調査区を設け、合計9箇所の調査区とした。

調査区は、耕作土等を重機で掘削し、壁面等は人力により精査した。適宜、写真と図面をとり記録に残した。

ここでは、直接関係する調査区のみを報告し本調査への流れを示す。

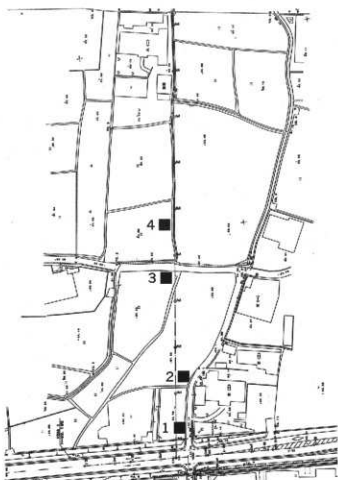


図 7 調査区配置図

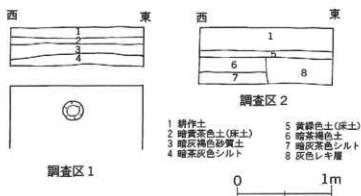


図 8 調査区1, 2土層図

### 第2節 確認調査概要

地形分類上、高位氾濫原に位置する場所である。調査対象地の南端に調査区1を北側の田に調査区2を設定した。(図7)

ここでは詳述しないが、残りの7つの調査区からは遺物の出土は少量見られたものの遺構などは検出されず、遺構と遺物が見つかったのは調査区1, 2のみであった。この2者は高位氾濫原にあり、他の調査区は低位氾濫原であった。

## 1 調査区 (図7)

### 調査区1

層序は耕作土、床土があり、その下に暗灰褐色砂質土の堆積が約10cm見られた。その下層は暗茶灰色シルトの地山面になる。高位氾濫原という性格上、砂質土の堆積が認められることも容易に理解でき比較的浅い場所に地山面が確認できることも特徴の一つといえる。

ここからは、遺物は伴わないもののpit状のものが確認された。

### 調査区2

層序は耕作土、床土が確認できた。調査区の東半分は灰色礫層が見られ、暗渠などの施設の可能性が考えられた。一方西半分は、暗茶褐色土の堆積が約20cm見られ、中から弥生土器や土器の出土が顕著に見られた。その下層は調査区1同様の暗灰茶色シルトの地山が確認できた。

道路予定地の性格上設計変更等が出来ないため、本調査に移行することが確実のためにこれ以上の拡張は行わず全面調査の際に遺跡の性格を確認することにした。

## 2 遺構 (図8)

調査区1よりpit状遺構が検出された。遺物が伴わないために時期などは不明であるが、調査区2の関係から弥生時代以降のものではないかと考えられた。全面調査に移行する関係から拡張は行わず、次の調査に委ねた。

調査区2は包含層といえる堆積ではあったが、何かの遺構内埋土の可能性もあった。(結果的には、溝状遺構の埋土ということが判った。)

## 3 遺物 (写1)

調査区1からは出土は無かったものの、調査区2から弥生土器と土器の出土が見られた。

図化できるようなものは無かったものの、破片で約20点の出土であった。

## 4 まとめ

南端に隣接する五合堂の現建物は古くは無いが、存在自体は中世にさかのぼる可能性を有している。旧所在地と考えられている場所は字五合堂にあり、周辺に中世の遺構が広がる可能性があった。結果、調査区1と調査区2の状況から、微高地と考えられる場所に遺構が広がり遺物が顕著に含むことから、周辺調査の必要性があると判断でき、次の本調査へと移行した。



写 1 調査区2出土遺物

### 第3章 平成20年度南田原条里遺跡発掘調査

#### 第1節 調査に至る経過

平成19年度に確認調査を実施した結果、高位氾濫原上に設定した調査区1と調査区2から遺構と遺物が確認された。道路建設という点と設計変更が不可能なことから協議の結果、本調査へと移行することになった。本発掘調査は8月から10月にかけて実施し、現地説明会終了後、空中写真撮影を行い現地での作業を終了した。その後、整理作業を行い報告書の刊行とした。

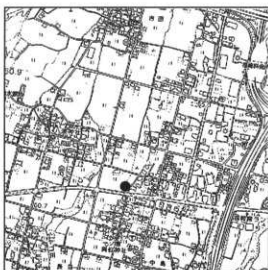


図9 調査場所位置図

#### 第2節 調査区概要

##### 1 調査方法

調査対象地は調査区1のあった田と、調査区2のあった田の2筆を対象地とした。それぞれの田の境目の畔を元に南区と北区に分けることができる。南区は町道東大貫中島線に接し、南端には現在も使用している用水路も存在する。また、西側は未買収地（工事対象外）のため調査対象とはせずに現況のままとして対応した。

また、北区は既に雑種地として利用している造成地があり、そこも道路予定地に含まれており買収後調査対象地とするかどうか検討した。確認調査においては北区南端において遺構や遺物が確認されたが、北の状況が余り明確でなかった。しかし、耕作土や盛土の除去を行い遺構検出の際に状況判断をして北側に広げるかどうかを決めて対応した。結果、土置き場のために掘削した場所においては、遺構は確認されず遺物についても見られなかったことから、今回の調査地区を持って対象地とした。

対象地内は、重機によって耕作土と埋土を掘削し、土置き場が隣接地に確保できないことから耕作土については調査対象地に近い場所へ運び出した。埋土については、北区の北に土置き場を確保して小山状に盛り上げてもらい上面を平場として写真撮影等に利用できるようにした。

調査区は周辺の用水路よりも低い位置にあることや排水路を確保できないことから、水はけを良くするために調査区内に小溝を設けた。確認用の溝の役目も果たすもので、地盤が固いことから効率化を高めるために小型の重機を用いて掘削を行った。それ以外の遺構検出における精査や遺構掘削は人力により行い、適宜写真や図面により記録を残した。

最後には、10月18日に現地説明会と空中写真撮影を行い遺跡の状況を理解しやすいようにした。



写2 現地説明会風景

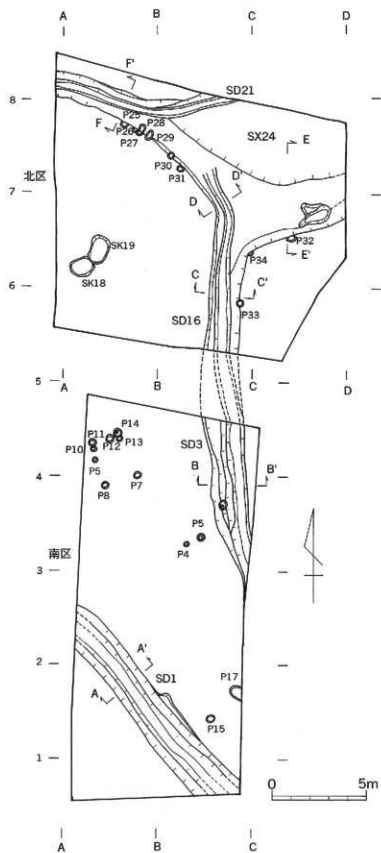


图 10 遺構配置図

## 2 土層 (図9)

対象地は、高位氾濫原であり現況では水田または雑種地として利用されており、南区は水田であったが、畑地として利用されていた。北区も水田から畑地として利用され、一部雑種地として利用されていた。そのために、耕作土が約20cmあり、その下層には床土が平均して約10cm見られるという状況であった。(図9)南区では暗灰褐色砂質土が見られたが、北区においてはその堆積が3cm程度の薄いもので北に行くほど5cm程度の堆積が見られる程度である。その下層に南区と北区も同様にシルト質土の地山面になる。この面に遺構が広がることが確認された。

## 3 遺構 (図10, 11, 12, 13)

南区には、SD1をはじめSD2, SD3, P4～P15, P17があり、北区には、SD16, SD21, SD22, SK18, SK19, P25～P33, SX24がある。

### 南区

#### SD 1

調査区の南端にある上部の幅が180cm～220cm、底面幅50cmのV字状を呈する溝になる。地山面を掘り込んで作られている溝は、上層から、暗灰色土、黒色シルト、黒色シルト質土、石混じりの黒色シルト質土となり、ここまでは皿状に堆積している。最下層は、黒色シルトを切り込むような形で黒色シルト質土が堆積する。遺物は、最上層から4層目の石混じりの黒色シルト質土層までに見られ、最下層においての出土は無かった。地山は場所によって色調や質が違うが、基本的にはシルト質土となっており、SD1においても遺構面から約60cm下層までシルト質土、それ以降は砂質土の堆積となっている。(図11)

調査区の南東から北西に向けて伸びる溝は底の高さを見ると、南端を基準として、測量ポイントごとに確認すれば最大で溝の南端から約4mのところまで13.8cm、最小で南端から約8mのところまで1.4cm下がっている。全体的には、あまり傾斜があるとはいえない。水の流れは北西に向かってしていると想定すると、北西方向には一段低い田があり、高位氾濫原から低位氾濫原に向かって流れがあることも想定できる。しかし、現況では水は北から南にかけて流れており、この溝も、北から南に水が流れていた可能性がある。ただし、堆積土の状況から常時水が流れていたとは考えがたく、一時的な流れがある排水路的な役割を果たしていたと考えられる。しかし、環濠集落の溝の一部の可能性もあり明確な機能は今後の課題としておきたい。

#### SD2

南区の調査区内北端にある溝で、SD3を切り込む形で確認された。西の肩は確認できたが、反対側の肩は確認できず、幅は不明である。また、北区にはSD3は伸びるものの、SD2の延長は確認できなかった。北区のSD2が伸びると考えられる部分に関しては、暗渠と考えられる石が詰め込まれたところが確認され、遺構は既に削平を受けているものと考えられた。

#### SD3

南区の調査区内北端にありSD2の下層に位置する。遺構面からの深さは約40cmをはかり上端の幅は最大で220cm程度になる。SD2は北区のSD16につながるもので幅と下端の状況も良く似ている。ここからは遺物の出土が見られた。

#### P4～P15、P17

それぞれ、小 pit であるが、P5 と P6 は柱痕のような形で pit 内に小 pit が認められるもので対になると考えられる。P6 は SD2 の上になり、切り合い関係からすると、SD2 より pit 群の方が新しいということが考えられる。しかし、pit 群においては遺物が伴わず、時代的には明確でないが、周辺から中世以降の須恵器類が採集されていることから、中世以降の遺構と考えられる。

P7、P8、P11、P14 は、それぞれが並び柱穴と考えられる様相を呈する。1×1 間以上の建物になると考えられるが、主軸は条里といわれている方向と完全には一致しない。

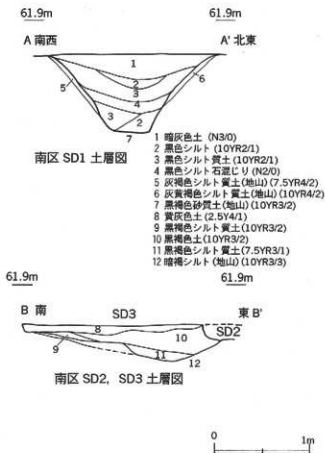


図 11 南区 SD1, SD2, SD3 土層図

#### 北区

##### SD16

南区 SD3 から延びる溝である。北区南端から約 6 m のところで二股に分かれるような形になるが、溝の最下層に当たる部分の溝状のものは西側へと続き最後には判らなくなる。東側に延びる部分も平坦面を持ち肩部分は北側に関しては明確にならないことからこの部分まで来ると溝という形にはなりにくい。このすぐ北部分には、SX24 の集石部分があり SD16 との関係が考えられるものである。ここからは、少量ではあるが遺物の出土が見られた。

##### SD21

SD16 の上層にあたる部分に灰黄褐色土があり、かなり新しい溝と考えられる。幅は約 60 cm 深さ約 10 cm 程度のものであった。その下層には黒褐色シルト質土の溝があり、SD16 につながるのではなく西から東に延びた後、そのまま北側に曲がって行ってしまふ。幅約 60 cm、深さ約 10 cm をはかる。遺物も少量見られた。

##### SD22

SD16 の上層部分にあり、灰色がかった黒褐色土であり、SD21 同様新しい溝と考えられる。ここからは、特に遺物の出土は見られなかった。幅約 30 cm、深さ約 5 cm 程度であった。

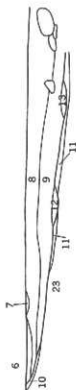


61.9m  
西



61.9m  
東

61.9m  
南西



61.9m  
北東

図12

61.9m  
南



61.9m  
北

61.9m  
北

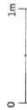


61.9m  
南

- 1 褐色土 (7.5YR4/1)
- 2 灰褐色土 (7.5YR4/2)
- 3 灰褐色土 (10YR4/2)
- 4 黒褐色シルト質土 (10YR3/2)
- 5 黒褐色シルト質土 (7.5YR3/1)
- 6 黒褐色土 (2.5YR3/1)
- 7 黒褐色土 (7.5YR3/1)
- 8 黒褐色土 (5YR3/1)
- 9 黒褐色土 (7.5YR3/2)

- 10 黒褐色シルト質土 (地山) (7.5YR3/3)
- 11 黒褐色シルト質土 (10YR3/3)
- 12 黒褐色シルト質土 (5YR3/1)
- 13 黒褐色粘質土 (5YR2/1)
- 14 黒褐色土 (10YR3/2)
- 15 黒褐色シルト質土 (5YR3/1)
- 16 黒褐色シルト質土 (地山) (10YR4/2)
- 17 暗赤灰色土 (5R3/1)
- 18 黒褐色粘質土 (10YR3/2)

- 19 赤灰色砂質土 (2.5YR4/1)
- 20 黒褐色粘質土 (10YR3/1)
- 21 黒褐色粘質土 (10YR3/2)
- 22 黒褐色粘質土 (5YR4/1)
- 23 黒褐色シルト質土 (7.5YR3/2)
- 24 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)
- 25 黒褐色砂質土小石混じり (地山) (10YR3/2)
- 26 黒褐色シルト質土 (地山) (7.5YR3/2)



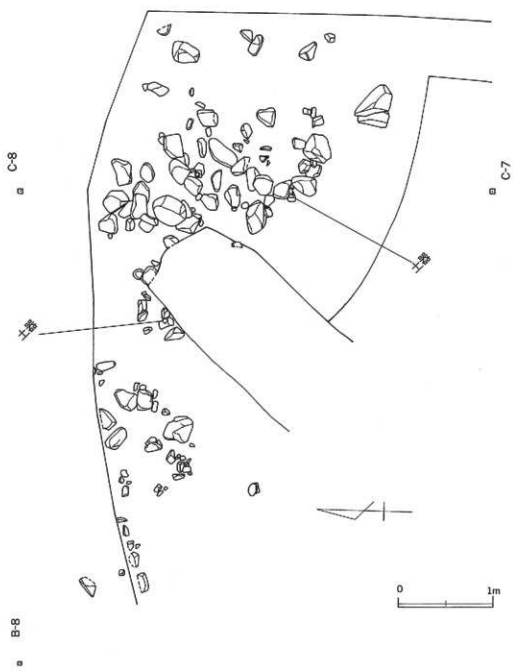


图13 SX24 出土状况图

#### SX24

SD16が二股に分かれるような形になるところから北側に集石が広がる。SD16の埋土の上層には灰色系の埋土があり、その下層に黒褐色系の埋土がある。灰色系の埋土は、切り合いから見ても新しい埋土と考えられ、上層の時期と下層の時期は異なる。北区断面3にはSD16の新しい埋土の関係と下層の関係が示され、下層はSX24と同じくらいの時期のものになる可能性が高い。集石に関しては、北区断面2に一部ではあるが黒褐色土層にあることが示され、北区土層断面3の暗青灰色土や砂層堆積の境から上にあることがわかった。SX24の集石中にも遺物が含まれていた。集石は、主として川原石と呼べる角が丸く滑らかなになった石で構成され、大きなものは長さが50cmを超えるものまでであった。

集石に関しては、基礎部分の石の並びや井戸のような構造物になるようなものはなく、墓になるようなものでもなかった。氾濫原としての自然石の堆積とは考えがたく、何らかのものに利用されていた石を廃棄したかのようであり、廃棄に伴う集石と考えておきたい。

#### SK18, SK19

SK18, SK19共に、黒色シルトが埋土となっていたが、遺物の出土は見られず、土抗状というのみで性格は不明である。

#### P25～P33

SD16に切られているものが多く、SD16よりも古いという程度で、遺物も伴わないことから時代も不明である。これらのpit群に関しては今のところ明確な遺構となりうるものではない。

#### 4 遺物 (図14～23)

遺構内で遺物の出土がみられた。排水溝掘削時や遺構検出時にも出土したのがあり、遺構に伴うと考えられるものは図化等を行った。遺物は弥生土器、須恵器類、石類、鉄類の出土がみられた

特に、南区SD1からは弥生土器等がまとまって出土した。

#### SD1 (図14～21)

遺構内で遺物の出土がみられた。排水溝掘削時や遺構検出時にも出土したのがあり、遺構に伴うと考えられるものは図化等を行った。遺物は弥生土器、石器類、石類、鉄類の出土がみられた

特に、南区SD1からは弥生土器等がまとまって出土した。弥生土器は、壺、甕が主なもので、石器類は、石包丁が1点出土した。(図21-6)また、石類には被熱痕が見られるものがあり(図21-1～3)、他には赤色を施してあるようなもの(図21-4)、表面が砥石状になっているもの(図21-5)がみられる。

遺物はいずれも最下層からの出土ではなく、中間の土層から出土した。また、完形品はなく、破片のみの出土であった。

図14は比較的残りのいい遺物であり、壺や甕になる。図15は残りのいい底部を図化したものである。

図14の1～4は壺の口縁部や頸部がわかるもので、1は口縁端部にヘラ状工具による施文をする。直線を1本施した後に、X状の文様を施しているもので、頸部にはヘラ描直線文が5本

施される。内外面共にハケ目がみられる。2は無文である。内外面共にハケ目が見られる。3は頸部のみが出土したが、頸部には3本の突帯が施され、その上にへら状工具による刻み目が施されている。外面にはハケ目が見られる。4は壺の口縁と考えたいが、鉢との指摘もあるものである。口縁の内面端部に突起状の突帯をめぐらせ、外面にも突帯を施す。この突帯の端部に刻み目を入れている。口縁部の端部には刻み目を施す。内外面共にハケ目が見られる。姫路市辻井遺跡出土遺物に類似のものが見られる。(5)

5～9は壺で反転復元できるものを示した。5は口縁端部に刻み目を持ち頸部に10本の多本化するへら描直線文を持つ。外面はハケ目が見られる。6も5と同様に口縁端部に刻み目を持ち10本のへら描直線文を持ち外面にハケ目が見られる。7は口縁の一部が破損しているものの口縁の生きている部分を観察すると逆L口縁壺と呼ばれるものになると考えられる。口縁端部は欠損しているために施文状況はわからないが、体部には櫛描直線文と波状文を施す。内面にハケ目と口縁部付近には指頭圧痕が見られる。8は口縁部が欠損しているが体部には櫛描直線文、波状文、直線文の組み合わせで施文が行われている。内面にハケ目と指頭圧痕が見られる。9も壺と考えられるもので、5～8に比べると大型のものになる。口縁部は欠損しているので施文は不明であるが、体部にいたっても無文の壺である。内外面共にハケ目が見られる。

図15は底部片で、壺や甕の底部と考えられる。2のように底部に穿孔のある、甕といわれるものも見られる。底部は大きく分けて4類に分れ、1類は1～2に見られるような、底部の外側が高台状になるもの、2類は3～7のような底部が平たいもの、3類は8～12のような底部の端部が突出するもの、4類はやや丸みを帯びるものである。

1類 1は底径8.4cmで外面はハケ目が見られ内面及び底部の高台状部はナデが施されている。底部の高台状部以外は未調整となっている。2は甕で底部の中央に穿孔がある。焼成後の穿孔と考えられ内側から外側に向けて圧力を加え穿孔を施したと考えられる。底部外面は弱いナデを行った後、底部の最下部は強いナデが施されている。

2類 3は底径7cmで外面はハケ目が見られ内面はナデ調整である。底部の接地面は未調整である。4は底径7.4cmで内外面共にナデが見られ底部の接地面は未調整である。土器の製作時もしくは乾燥時に植物の上のせたために、植物の痕跡が見られる。5は遺構検出時にSD1から出土したもので、3類のようではあるが殆ど突出しないことから2類とした。外面にはハケ目がみられ内面はナデが施される。底部接地面は未調整である。6は底径7.6cmで内外面共にナデが施され、底部接地面は未調整である。7は底径13.6cmと他の2類より大型のものになる。底部の欠損が激しく1類との区別もしがたいが、残存部の様子から2類とした。外面はハケ目が施され内面はナデが見られる。外面にはすずの付着が見られ、土器が使用されていたことを示すものと考えられる。すずの付着から甕の底部の可能性が高い。

3類 底部の接地面端部が突出するもので8は底径7cmで外面には粗いハケ目が施され内面はナデである。底部接地面は未調整となっている。9は底径6.8cmで内外面共にナデが施され内面の底部分は指頭圧痕が認められる。底部接地面は未調整である。10は底径7.9cmで内外面共にナデが施され、底部接地面もナデ調整が行われる。11は底径8.2cmで外面はハケ目内面はナデが施される。内面の底部分には指頭圧痕が見られる。底部接地面はナデが施される。12は底径8cm 外面は粗いハケ目があり接地面に近いところはナデが施される。内面はナデがあり、底部接地面はナデが施される。

4類 丸みを帯びる底で、13は底径9.5cmで内外面共にナデが施され底部接地面は未調整である。

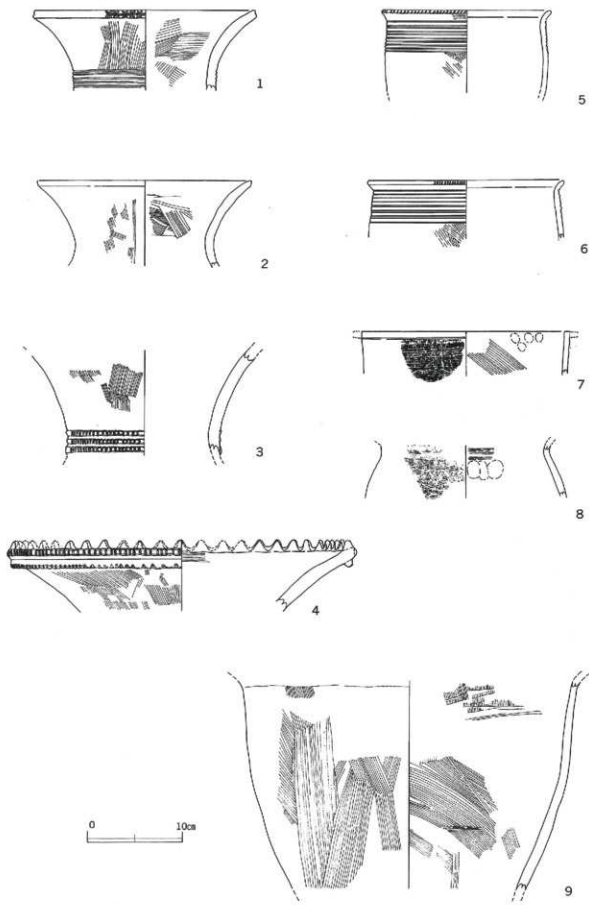


图14 SD1 出土遺物

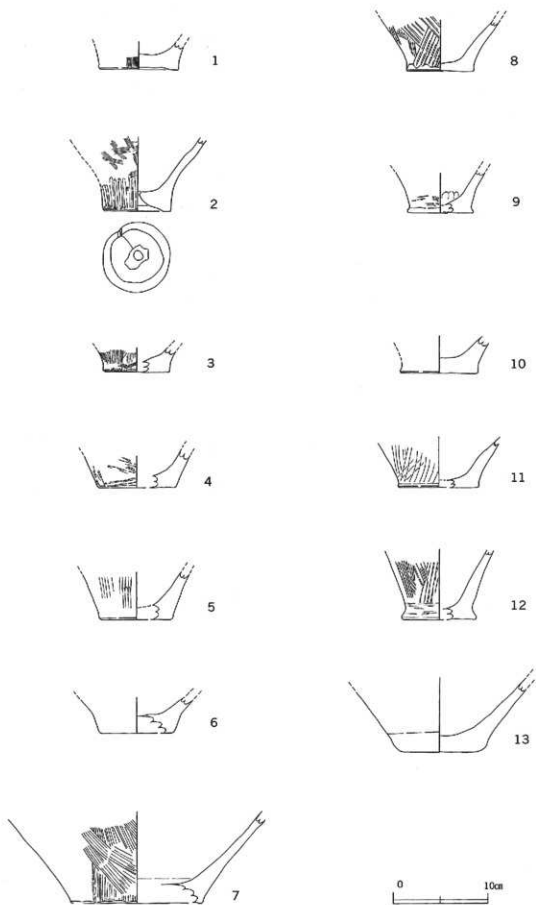


图15 SD1 出土遺物

反転復元等が出来得るものは図 14、図 15 のものであり、他のものは細片であり復元は困難であった。しかし、施文されている遺物がいくつか出土しており、施文がある遺物は可能な限り図化した。(図 16～20)

図 16 は口縁部が残っているもので、1～4、7～14 は裏、5、6 は壺である。

襷 (図 16-1～4、7～14)

襷については口縁端部の形状で 1 類と 2 類に分け、それぞれを細分する。1 類は逆 L 口縁のものとする。1、2、7 が該当する。1-1 類は、口縁端部が無文のものとし、1、2 が該当する。1-2 類は口縁端部に施文をするもので 7 が該当する。2 類は、外反口縁襷といわれるもので、3、4 と 8～14 が該当する。それぞれ、2-1 類、2-2 類、2-3 類に細分する。2-1 類は口縁端部、体部共に無文のものとし、3、4 が該当する。2-2 類は口縁端部が無文で体部に施文があるものとし、8 が該当する。2-3 類は端部と体部共に施文があるものとし、9～13 が該当する。14 においては、体部が判らないが、口縁端部に施文のあるものは体部にも施文することから、2-3 類に入れる。

## 1 類

1-1 類 口縁端部が無文である。1、2 は共に外面はハケ目が施され内面から口縁端部まではナデが施される。

1-2 類 口縁端部に刻み目を持つ。7 は端部以外は 1、2 同様ナデが施される。2-3 類のパターンから行けば口縁端部に施文を持つものは体部にも施文を持つことが多く、これも、体部に施文されていた可能性が高い。

## 2 類

2-1 類 口縁端部と体部共に無文のもので、3 は口縁部外面と体部外面のところに指頭圧痕が見られ、その上をナデで調整している。全体的に内外面共にナデが施される。4 は折り曲げた口縁部外面の曲がったところには指頭圧痕が見られ、体部外面と口縁端部はナデが施される。内面はハケ目が見られる。

2-2 類 口縁端部が無文で体部に施文があるもので、8 は体部外面に半截竹管による直線文が見られる。2 本 1 対のものが 3 対見られる。内外面共にナデが施される。

2-3 類 口縁端部と体部に施文があるもので、施文の種類によってさらに細分できる。2-3a 類は体部の施文がヘラ描のもの、2-3b は体部の施文が半截竹管のもの 2-3c は体部の施文が櫛描のものとする。

2-3a 類 図 16 にはないが、図 14-5、6 が該当する。

2-3b 類 口縁端部に刻み目を持ち、体部に半截竹管の直線文を施すものである。9 は口縁端部に刻み目と体部に 2 本 1 対の直線文が 6 対見られる。内面はナデが施される。10 は口縁端部に刻み目と体部に 2 本 1 対の半截竹管の直線文が 3 対見られる。上の 2 対と下の 1 対の直線文の幅に差異があることから少なくとも 2 種類の半截竹管を用いて施文していると考えられる。内外面はナデが見られる。11 は口縁端部に刻み目と体部に 2 本 1 対の半截竹管の直線文を少なくとも 2 対施す。下部が欠損のため残りは不明である。内外面ともナデが見られる。

2-3c 類 口縁端部に刻み目を持ち、体部には櫛描文を持つものである。12 は口縁端部に刻み目を持ち体部に 5 本の櫛描直線文を施す。内外面ともナデが見られる。13 は口縁端部に刻み目を持ち体部に少なくとも 4 本以上の櫛描直線文を施す。下部が欠損のため本数は不明である。内外面ともナデが施される。

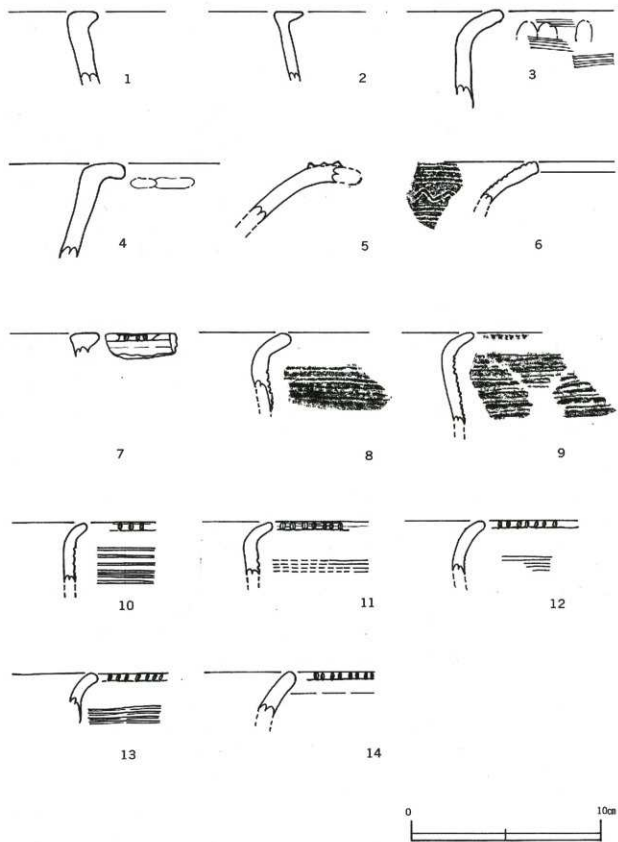


图16 SD1 出土遗物



#### 壺 (図 16-5, 6)

5は広口壺の口縁で内面を3本の突帯で加飾するものである。突帯をつけた後、全体をナデ上げる。外面は突帯がある反対側部分はナデが施され、それ以下、頸部方向にかけてはハケ目が見られる。6は壺の口縁と考えられ、半截竹管の直線文と波状文の組み合わせによって加飾している。ナデた後に加飾しており、口縁端部に近い方から2本1対の半截竹管の直線文2対+半截竹管 波状文1対+半截竹管 直線文2対の組み合わせになっている。このように口縁内部を加飾する例が姫路市辻井遺跡例でも見られる。(7)

#### 施文された土器類 (図 17~20)

施文された土器類は、甕が中心ではあるが壺と考えられるものも見られる。ここでは、施文方法を分類し概観していく。

施文方法によって、A類、B類、C類、D類と区分しそれぞれを細分する。

A類は突帯を有するものとし、B類は、へら描文を有するもの。C類は半截竹管による施文を行うもの。D類は櫛描文による施文を行うものとする。

#### A類 (図 17-6~8)

1本の突帯のものをA-1類、複数のをA-2類とし、さらに突帯上の施文の有無によってA-2a類とA-2b類に細分する。

A-1類 図17-8になり、壺の頸部などに施される突帯の様相を呈する。内外面共にナデが見られる。

A-2a類 複数の突帯を有し、施文が無いものである。図17-6になり、少なくとも3本以上の突帯がある。突帯をつけたあと全体をナデている。

A-2b類 図17-7になり5本の突帯がみられ、5本の外側の2本に刻み目を施す。突帯部分はナデを施し、それ以外はハケ目が見られる。内面は剥離が著しく調整は不明である。

#### B類 (図 17-1~5)

へら描文と考えられるもので、半截竹管のように対をなさないものとした。1~3は細片であるが、明瞭に沈線が見られ、少なくとも1, 2は4本の直線文となり、3は5本の直線文となる。内外面にナデが見られる。4は3本の直線文が見られ内面はナデだが、外面はハケ目が見られる。5は5本の直線文が見られ、内面はナデで外面はハケ目が見られる。これらは共に甕の可能性が高い。

#### C類 (図 18, 19)

C類は、半截竹管による施文を行うものとし、直線文のみで構成されているものを、C-1類、直線文と波状文の組み合わせで構成されているものをC-2類とする。

C-1類 図18-1~13が該当し、施文部位の形状から1, 4, 12は壺、2, 3, 5, 6, 7~11, 13は甕と考えられる。

壺に施された施文として、1は2本1対の直線文のみ確認できるが、下部が欠損のため本数は不明である。4は2本1対の直線文が2対あるが上部欠損のため本数は不明である。12は2本1対の直線文が3対見られる。甕においては、半截竹管を用いた直線文は、2, 3, 9のように2~3対のものや5~8, 10, 11, 13のように4対以上のものが見られる。

2, 3, 6のように1種類の半截竹管を用いて施文するものや7のように2種類以上のものを

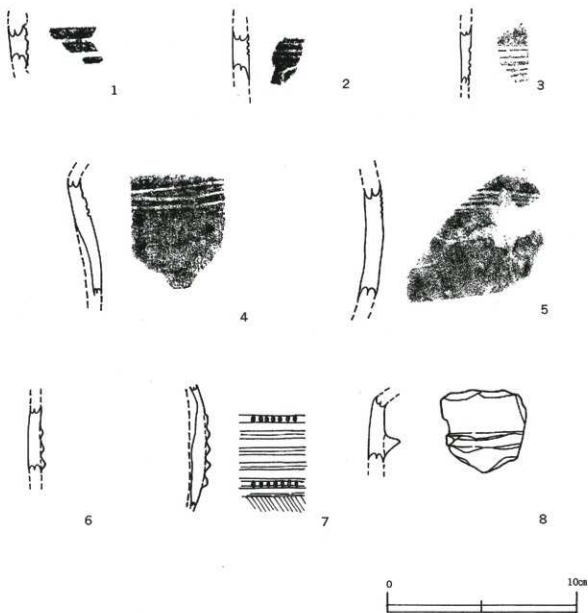


図17 SD1 出土遺物

用いて施文するものも見られる。調整は、外面にハケ目が見られるもの（1, 2, 3, 6, 7, 11）や他はナデのみが見られるものがある。内面は共にナデが見られる。

（6）『弥生土器集成と編年一編』大手前大学史学研究所オープン・リサーチ・センター研究報告第5号 2007年3月  
大手前大学史学研究所

（7）（6）に同じ

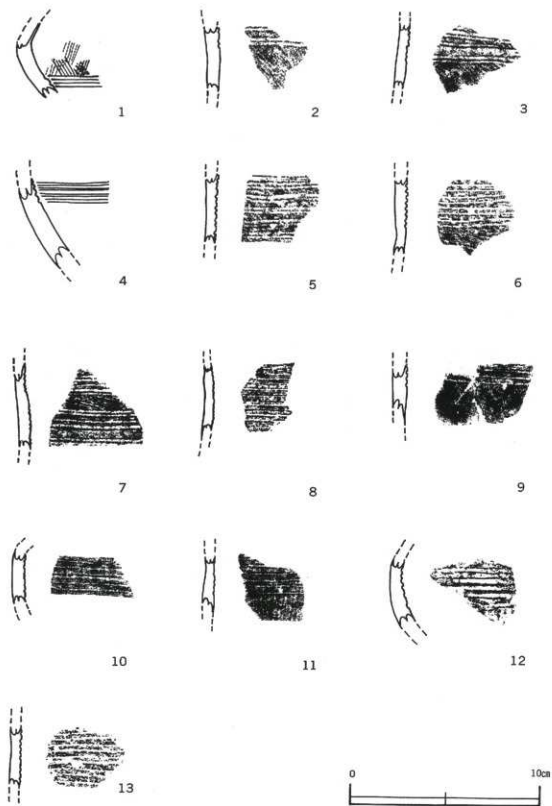


图18 SD1 出土遺物

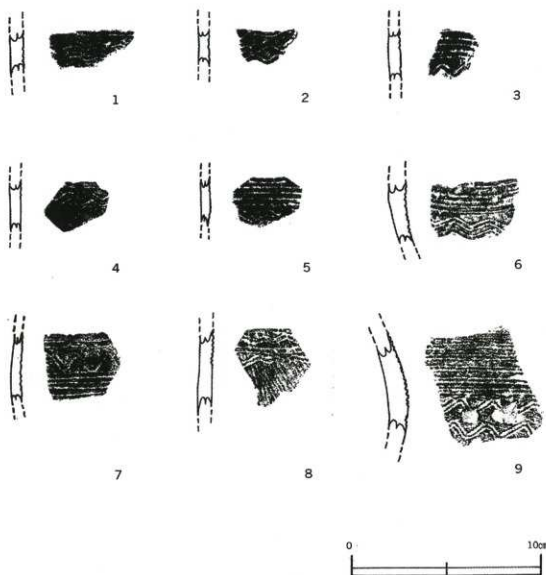


図19 SD1 出土遺物

C-2類 図19-1~9が該当し、直線文と波状文の組み合わせがある。1は直線文の下に2本1対の波状文を2対施す。2は波状文のみが残っているが、他のパターンから行くと直線文と共に構成されている可能性が高い。3は土器の状態から図16-6と同一固体の可能性はある。4、5は直線文と波状文の組み合わせで、6、9は直線文の本数が多く波状文も複数となる。7、8は直線文+波状文+直線文の組み合わせで、8にいたってはもう一度波状文を用いている。細片のものが多く外面における調整は明瞭なものは少ないが、C-1類同様、ハケ目を用いるものナデのみが見られるものがあるようである。しかし、部分的のため全体としてはハケ目が施されている可能性が高い。また、内面はC-1類同様ナデが施されている。

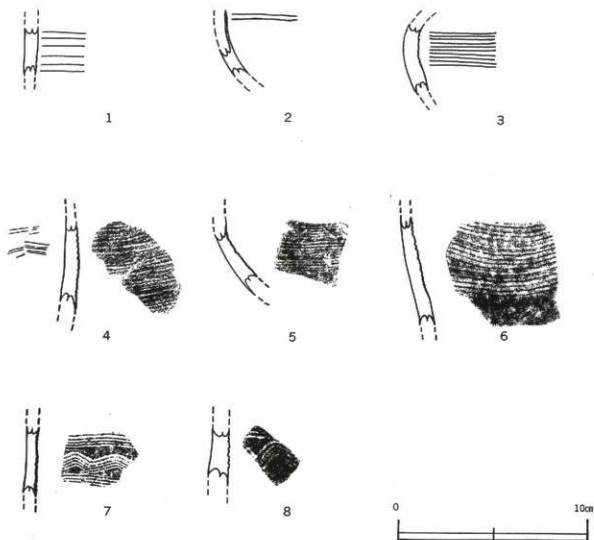


図20 SD1 出土遺物

#### D類 (図20)

複数の直線文や波状文を櫛状工具を用いて施文するものをいい、直線文のみのものをD-1類、直線文と波状文があるものをD-2類とする。

D-1類 図20-1～6が該当し、1は磨耗が激しいが6本以上の直線文が施される。2は細片ではあるが直線文の状況からここに入れた。3は4本の直線文が2対施されている。4は6本の直線文が4対施されている。5は5本の直線文が3対、6は5本の直線文が3対施されている。内面はいずれもナデが見られる。

D-2類 図20-7、8が該当し、7は同様の工具によって、5本の直線文+5本の波状文+5本の直線文が見られる。8は細片ではあるが波状文から判断して、5本の直線文+5本の波状文の組み合わせである。内面はナデが見られる。

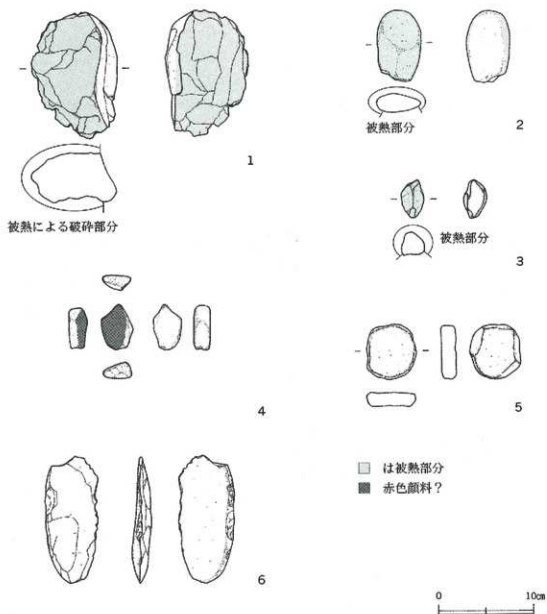


図21 SD1 出土遺物

### 石類 (図21)

図21-1～3は被熱痕があり、1についてはかなりの熱を受けていると考えられ、破砕している。2は熱の温度差により赤色変化をしているところと黒色になっているところがある。3は赤色変化が見られる。4は被熱ではないが、赤色変化をしているところがあり、詳細検査をしていないので顔料かどうかわからない。5は平面から見るとやや丸い形になり断面では平坦になるもので、平らな面は砥石状になっている。自然石の可能性もある。

### 石器 (図21-6)

石包丁が出土した。長辺 13.6cm、短辺 5.1cmをはかる。凝灰岩質の川原石のようなものを加工していると考えられる。類例として、たつの市新宮宮内遺跡からの出土品がある。(6)

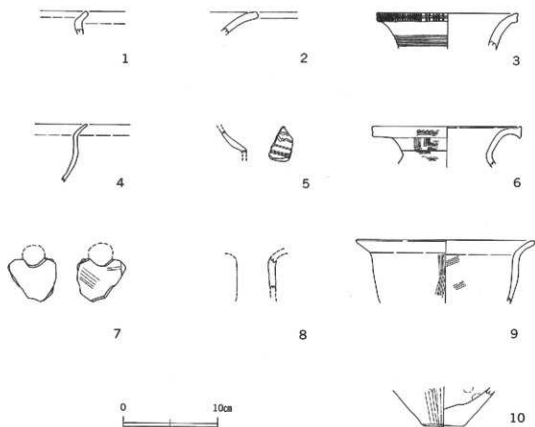


図22 SD2 出土遺物

#### SD2 (図22)

出土遺物では破片が多く図化できるものが少なかった。図22に示しているが、壺、甕、高杯が見られた。

1は甕の口縁部と考えられる。2は甕の口縁と考えられる。体部に当たるところに僅かであるが櫛描文の痕跡が見られる。3は壺の口縁で口縁端部にへら描直線文と上下に刻み目を入れて施文する。頸部はへら描直線文が4本見られる。口径15cmとなる。4は甕と考えられ、内外面にナデが見られる。5は壺と考えられ、半截竹管による波状文と直線文、一部へら描直線文を施す。6は壺で、口縁端部に櫛描波状文を施す。内面はナデが見られ、外面は強いナデのほかに頸部にハケ目があり体部との境は段になるくらい強いへらナデが見られる。7は高杯等の脚部分ではないかと考えられ、丸い透かしがある。8は高杯の脚と考えられる。9は甕と考えられ、内外面にハケ目が見られる。外面は被熱により磨耗が激しい。10は甕などの底部になり外面にへら状工具によるナデが見られ、内面は指頭圧痕がある。

#### SD3・SD16 (図23)

南区のSD3からは図化できる遺物が少量出土したが、続いていると考えられる北区のSD16からは、細片は出土したものの図化できるものは少なかった。

SD3からの出土遺物は図23-1~10で、1は壺の口縁、2は甕の口縁と考えられる。3は壺の口縁で口縁端部は磨耗が激しく施文は確認できなかった。外面はハケ目が見られ、内面は

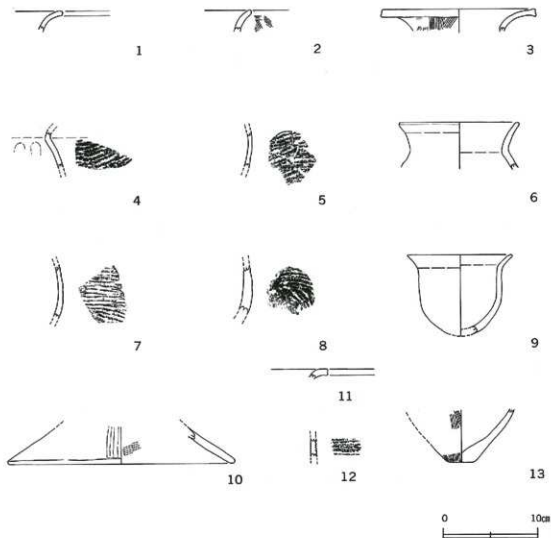


図23 SD3・SD16 出土遺物 (SD3: 1～10 SD16: 11～13)

ナデが施される。4, 5, 7, 8は甕と考えられ、外面はタタキが見られる。3は口縁部に近いところで内面には指頭圧痕がのこる。8は逆に底部に近いところで底部付近は肥厚する。6は壺の口縁で口径 12.6cmとなる。9は内外面がナデが見られる。外面は被熱痕がある。口径 10.8cm、10は高杯の脚と考えられる。外面はヘラによるナデが施され、内面はナデながらも一部ハケ目が見られる。底径 23.6cmとなる。

SD16の遺物は図 23 - 11～13 となり、11は壺の口縁の一部と考えられる。12は半截竹管による直線文を2本1対のものを3対施す。13は甕などの底部で外面にハケ目とナデを施し、内面はナデが見られる。

(8) 『新宮宮内遺跡 史跡公園化構想に基づく発掘調査』 新宮町文化財調査報告3 2005年 新宮町教育委員会



## 第4章

### まとめ

南田原条里遺跡は、条里として考えられることから、南田原条里遺構として認識されてきた。遺跡地図においても条里と考えられる場所に印が入り、遺跡としての取扱を順次行っている。確認調査の対象地は、低位氾濫原が多く見られ、そのために遺構と呼べるものの存在を確認するに至らなかった。しかし、遺物は少量ではあるが出土しており、条里と直接関係しない時代の遺物も確認でき、周辺の歴史を考える上で貴重な情報を提供してもらっていた。

特に、近年では個人住宅の建設が見られるようになり、旧村の構成集落の中やその周辺を調査する機会が増えた。その場所は、高位氾濫原と位置づけられる場所であり、明らかに低位氾濫原との差異がある。そこは、地山面が非常に浅いところで確認でき、遺物も比較的多く出土する。また、遺構が確認できるところもあり、近世集落や中世以前の歴史を垣間見ることが出来る資料が見つかった。

南田原条里遺跡第7次調査では、高位氾濫原と呼ばれる地形上から、包含層が確認でき、まとまった遺物の出土があった。その結果、遺跡は高位氾濫原を中心として広がることが想定でき、第9次調査において、町道建設予定地内の高位氾濫原部分に遺構が広がることが確認でき、第10次調査において新資料の発見へとつながっていった。

SD1からは、弥生時代中期初頭の遺物が出土した。調査区で確認された中では、中期後半の土器などは見つかっておらず、単一時期の遺物として考えることができるのではないかと。溝の廃絶時期も少なくとも中期前半で終焉を迎えるものと考えられる。空中写真や微地形を考える際の地形図と照合すると、高位氾濫原と考えられる地形は、古くからある中島集落と符合することがわかる。SD1は高位氾濫原の微高地上の北端部分といえる場所で見つかった。先述の中島集落の北端といってもいい場所であり、この集落を取り巻く形で溝が存在する可能性がある。SD1に関連する集落遺跡が今回の調査区の南方に広がると考えられる。

次代につながる遺跡は、南西方向の段丘上に存在する南田原長目遺跡があり、南田原条里遺跡第10次調査場所とのかかわりも注目される。

SD2やSD3やSD16からは、弥生時代後期以降の土器類も出土しており、再びこの地において人々の生活が営まれていた可能性がある。

ここでは土器の詳細には触れていないが、この度の遺跡は市川中流域でも知られていない時期のものであり、前期の遺跡と共に弥生時代のあり方を考えていく上でも貴重な資料を提供してくれた。

今後も、南田原条里遺跡の調査は開発と共に進んでいくことになるが、氾濫原地形における遺跡のあり方などを見極めながら検討して行きたいと思う。

## 出土遺物観察表

図番 番号	地区名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	形態・技法・特徴	胎 土	焼 成	分 類
				口径	腹径	底径	器高					
14-1	南区 SD1	弥生土器	壺	(23.0)			残 8.5	内ぶい、縹 10YR6/4	ヘラ描直線文、ハケ目	大きい砂粒 多量に含む	良好	
14-2	南区 SD1	弥生土器	壺	(22.6)			残 9.3	縹 5YR6/6	ハケ目、ヨコナデ	小石少量含む	良好	
14-3	南区 SD1	弥生土器	壺				残 11.2	縹 7.5YR7/6	ハケ目、刻目文、 貼り付け突帯あり	φ 1cmの小 石含む	良好	
14-4	南区 SD1	弥生土器	壺	(35.2)			残 7.6	内縹 7.5YR7/6 外褐灰 10YR5/1	ハケ目、刻目文、貼り付け 突帯	φ 4mmの砂 粒含む	良好	
14-5	南区 SD1	弥生土器	壺	(17.6)			残 8.7	内ぶい、縹 10YR6/3	ヘラ描直線文、刻目文、ナ デ、ハケ目	小石かなり 多く含む	良好	2-3 c類
14-6	南区 SD1	弥生土器	壺	(20.6)			残 6.4	縹 2.5YR6/ 8	ヘラ描直線文、刻目文、ナ デ、ハケ目	少量の砂粒 含む	良好	2-3 c類
14-7	南区 SD1	弥生土器	壺	(22.0)			残 4.6	浅黄緑 10YR8/3	櫛描直線文、櫛描波状文、 ハケ目、指頭圧痕	砂粒含む	良好	D-2類
14-8	南区 SD1	弥生土器	壺				残 5.6	縹 5YR6/6	櫛描直線文、櫛描波状文、 黒斑あり、横ナデ	精良	良好	
14-9	南区 SD1	弥生土器	壺				残 22.1	外縹 2.5YR6/ 8 黒 帯 10YR3/2 内縹 2.5YR6/8	ハケ目、黒斑あり	砂粒少量含む	良好	
15-1	南区 SD1	弥生土器	壺			8.4	残 3.0	内ぶい、縹 10YR6/4	ハケ目、ナデ	砂粒多く含む	良好	1類
15-10	南区 SD1	弥生土器	壺			7.9	残 4.0	暗紫灰 5P3/1	ナデ	5mmの小石 含む	良好	3類
15-11	南区 SD1	弥生土器	壺			(8.2)	残 5.4	内ぶい、縹 10YR6/4 外にぶい、縹 7.5YR7/4	ハケ目、ナデ、指頭圧痕	φ 3mmの砂 粒多く含む	良好	3類
15-12	南区 SD1	弥生土器	壺			(8.0)	残 7.35	灰赤 7.5R5/2	ハケ目、ナデ	小石少量含む	良好	3類
15-13	南区 SD1	弥生土器	壺			9.5	残 8.0	外明赤褐 2.5YR5/6 内褐灰 10YR4/1	ナデ	小石かなり 多く含む	良好	4類
15-2	南区 SD1	弥生土器	こしき			7.0	残 7.6	浅黄緑 7.5YR8/4	ナデ	砂粒多く含む	良好	1類
15-3	南区 SD1	弥生土器	壺			(7.0)	残 2.7	縹 5YR7/6	ハケ目、ナデ	砂粒多く含む	良好	2類
15-4	南区 SD1	弥生土器	壺			(8.2)	残 4.2	内ぶい、赤褐 5YR5/3	ナデ	4mmの小石 多く含む	良好	2類
15-5	南区 SD1	弥生土器	壺			(7.4)	残 5.2	内ぶい、縹 10YR7/2 外浅黄緑 10YR8/3	ハケ目、ナデ	砂粒かなり 多い	良好	2類
15-6	南区 SD1	弥生土器	壺			(7.6)	残 3.9	内浅黄緑 10YR8/3 外にぶい、赤褐 2.5YR5/4	ナデ	φ 3mmの小 石多く含む	良好	2類
15-7	南区 SD1	弥生土器	壺			(13.6)	残 9.8	褐灰 7.5YR4/1	ハケ目、ナデ	φ 5mm小石 少量含む	良好	2類
15-8	南区 SD1	弥生土器	壺			(7.0)	残 5.5	内褐灰 5YR4/1 外にぶい、縹 5/4	細いハケ目、ナデ	砂粒多く含む	良好	3類
15-9	南区 SD1	弥生土器	壺			(6.8)	残 4.6	赤灰 2.5YR4/ 1	ナデ	砂粒多く含む	良好	3類
16-1	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.9	縹 5YR6/6	ハケ目、ナデ	精良	良好	1-1類
16-10	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.15	内ぶい、縹 10YR7/4	半散竹管の直線文、刻目文	砂粒多く含む	良好	2-3b類
16-11	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.8	明褐灰 7.5YR7/2	半散竹管の直線文、刻目文、 ナデ	少量の砂粒 含む	良好	2-3b類
16-12	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.8	縹 7.5YR6/6	櫛描直線文、刻目文、ナデ	砂粒少量含む	良好	2-3c類
16-13	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.7	縹 5YR6/6	櫛描直線文、刻目文、ナデ	ごく少量の 砂粒含む	良好	2-3c類
16-14	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.4	内ぶい、縹 7.5YR7/4	刻目文あり	少量の砂粒 含む	良好	2-3類
16-2	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.7	縹 5YR6/8	ハケ目、ナデ	精良	良好	1-1類
16-3	南区 SD1	弥生土器	壺				残 5.1	内ぶい、縹 7.5YR5/3	ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	φ 4 mm の砂粒含む	良好	2-1類

出土遺物観察表

図号	地区名	種別	発掘	注 量 (cm)				色 調	形態・技法・特徴	胎土	構成	分類
				口径	腹径	底径	器高					
16-4	南区 SD1	弥生土器	壺				残 5.0	赤褐色 2.5YR5/6	ナデ、ハケ目、指頭汪底	砂粒多く含む	良好	2-1 類
16-5	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.2	明赤褐色 5YR5/6	ハケ目、ヨコナデ、ナデ	φ 3mmの砂粒少量含む	良好	
16-6	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.3	内明赤褐色 2.5YR5/8 外褐色 10YR4/1	内面に半軟竹管の直線文 半軟竹管の波状文	細かい砂粒多く含む	良好	
16-7	南区 SD1	弥生土器	壺				残 1.2	褐色 5YR6/6	刻目文	少量の砂粒含む	良好	1-2 類
16-8	南区 SD1	弥生土器	壺				残 4.3	にぶい褐色 7.5YR6/4	半軟竹管の直線文、ナデ	φ 5mmの小石多く含む	良好	2-2 類
16-9	南区 SD1	弥生土器	壺				残 4.9	にぶい褐色 7.5YR7/3	半軟竹管の直線文、刻目文 ナデ	少量の砂粒含む	良好	2-3b 類
17-1	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.2	にぶい褐色 7.5YR7/3	へら描直線文	砂粒多く含む	良好	B 類
17-2	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.1	灰白 10YR8/2	へら描直線文	砂粒多く含む	良好	B 類
17-3	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.2	灰白 7.5YR6/3	へら描直線文	少量の砂粒含む	良好	B 類
17-4	南区 SD1	弥生土器	壺				残 6.3	灰褐色 7.5YR4/2	へら描直線文、ハケ目、 ナデ	砂粒少量含む	良好	B 類
17-5	南区 SD1	弥生土器	壺				残 6.3	内黒褐色 7.5YR3/1 外褐色 2.5YR6/8	へら描直線文、ハケ目	精良	良好	B 類
17-6	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.5	褐色 2.5YR6/6	貼り付け突帯あり	少量の砂粒含む	良好	A-2a 類
17-7	南区 SD1	弥生土器	壺				残 6.7	にぶい黄褐色 10YR7/3	貼り付け突帯あり 刻目文あり	砂粒多く含む	良好	A-2b 類
17-8	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.4	にぶい褐色 7.5YR7/4	貼り付け突帯あり	精良	良好	A-1 類
18-1	南区 SD1	弥生土器	壺				残 4.0	内黒褐色 7.5YR3/2 外褐色 5YR6/6	半軟竹管の直線文、ハケ目 ナデ	砂粒少量含む	良好	C-1 類
18-10	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.9	暗赤灰 2.5YR3/1	半軟竹管の直線文、ナデ	砂粒少量含む	良好	C-1 類
18-11	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.2	外灰 N4/0 内褐色 7.5YR7/6	半軟竹管の直線文、ハケ目 ナデ	砂粒少量含む	良好	C-1 類
18-12	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.8	にぶい褐色 5YR6/4	半軟竹管の直線文	砂粒多く含む	良好	C-1 類
18-13	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.4	内にぶい褐色 5YR6/4 外にぶい黄褐色 7/3	半軟竹管の直線文、ナデ	小石かなり多く含む	良好	C-1 類
18-2	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.5	内淡黄褐色 7.5YR8/4 外暗赤 N3/0	半軟竹管の直線文、ハケ目 ナデ	砂粒少量含む	良好	C-1 類
18-3	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.6	にぶい黄褐色 10YR7/3	半軟竹管の直線文	少量の砂粒含む	良好	C-1 類
18-4	南区 SD1	弥生土器	壺				残 4.7	外明赤褐色 2.5YR5/6 内にぶい黄褐色 10YR7/3	半軟竹管の直線文、ナデ	砂粒多く含む	良好	C-1 類
18-5	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.6	にぶい褐色 7.5YR6/3	半軟竹管の直線文、ナデ	少量の砂粒含む	良好	C-1 類
18-6	南区 SD1	弥生土器	壺				残 4.1	内褐色 5YR6/6 外にぶい褐色 7.5YR6/3	半軟竹管の直線文、ハケ目 ナデ、指頭汪底	少量の砂粒含む	良好	C-1 類
18-7	南区 SD1	弥生土器	壺				残 4.5	褐色 7.5YR7/6	半軟竹管の直線文、ハケ目	少量の砂粒含む	良好	C-1 類
18-8	南区 SD1	弥生土器	壺				残 4.0	にぶい赤褐色 5YR5/4	半軟竹管の直線文、ナデ	φ 2mmの砂粒多く含む	良好	C-1 類
18-9	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.2	にぶい褐色 5YR6/4	半軟竹管の直線文、ナデ	φ 5mm前後の小石多く含む	良好	C-1 類
19-1	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.4	淡黄褐色 10YR8/3	半軟竹管の直線文 半軟竹管の波状文	砂粒多く含む	良好	C-2 類
19-2	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.0	にぶい赤褐色 5YR5/3	半軟竹管の波状文	細かい砂粒少量含む	良好	C-2 類
19-3	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.8	褐色 2.5YR6/6	半軟竹管の直線文、半軟竹管の波状文、ナデ	細かい砂粒多量含む	良好	C-2 類

## 出土遺物観察表

図録 番号	地区名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	形態・技法・特徴	胎 土	焼 成	分 類
				口径	履径	底径	器高					
19-4	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.7	褐灰 7.5YR4/1	半葉竹管の直線文、半葉竹管の波状文、ナデ	砂粒多く含む	良好	C-2類
19-5	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.6	内裡 2.5YR6/8 外赤 10YR5/8	半葉竹管の直線文、半葉竹管の波状文、ナデ	砂粒多く含む	良好	C-2類
19-6	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.5	内裡灰 7.5YR4/1 外洗黄橙 10YR8/3	半葉竹管の直線文、半葉竹管の波状文、ナデ		良好	C-2類
19-7	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.8	外洗黄橙 10YR8/4 内裡 5YR6/6	半葉竹管の直線文、半葉竹管の波状文、ナデ	φ 3mmの砂粒多く含む	良好	C-2類
19-8	南区 SD1	弥生土器	壺				残 4.6	内におい黄橙 10YR7/3 外裡 5YR6/6	ハケ目の後へラ描直線文、へラ描波状文	細かい砂粒含む	良好	C-2類
19-9	南区 SD1	弥生土器	壺				残 6.1	外暗赤灰 10YR3/1 内におい赤褐 5YR5/4	半葉竹管の直線文、半葉竹管の波状文、ナデ	砂粒多く含む	良好	C-2類
20-1	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.6	内におい黄橙 10YR5/3 外裡 5YR6/8	柳指直線文、磨耗が激しい	φ 3mmの砂粒含む	やや軟	D-1類
20-2	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.4	内におい裡 7.5YR7/4	柳指直線文、ナデ	砂粒少量含む	良好	D-1類
20-3	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.8	裡 5YR6/8	粗い柳指直線文	砂粒多く含む	やや軟	D-1類
20-4	南区 SD1	弥生土器	壺				残 5.3	内におい裡 7.5YR5/3	粗い柳指直線文、ハケ目、ナデ	砂粒多く含む	良好	D-1類
20-5	南区 SD1	弥生土器	壺				残 4.1	外におい黄橙 10YR5/3 内におい裡 7.5YR7/4	柳指直線文、ナデ	精良	普通	D-1類
20-6	南区 SD1	弥生土器	壺				残 5.8	赤褐 5YR4/6	粗い柳指直線文、ハケ目、ナデ	砂粒多く含む	良好	D-1類
20-7	南区 SD1	弥生土器	壺				残 3.5	裡 7.5YR7/6	柳指直線文、柳指波状文、ナデ、指図圧痕	砂粒多く含む	良好	D-2類
20-8	南区 SD1	弥生土器	壺				残 2.8	内裡 2.5YR6/6 外褐灰 5YR4/1	柳指直線文、柳指波状文、ナデ	砂粒少量含む	良好	D-2類
21-1	南区 SD1	石							被熱により破砕している。			
21-2	南区 SD1	石							被熱により赤色変化している。			
21-3	南区 SD1	石							被熱により赤色変化している。			
21-4	南区 SD1	石							赤色顔料?			
21-5	南区 SD1	石						灰白 7.5Y8/1	礫石状に表面が滑らか。			
21-6	南区 SD1	石包丁		全長 13.6	幅 5.1				川原石状の自然石を割って仕上げた。	凝灰岩質		
22-1	南区 SD2	弥生土器	壺				残 2.5	灰黄褐 10YR5/2	ナデ	砂粒多く含む	良好	
22-10	南区 SD2	弥生土器	壺			(4.2)	残 4.2	内裡灰 7.5YR4/1 外におい赤褐 5YR5/4	へラ状工具によるナデ、指図圧痕	細かい砂粒含む	良好	
22-2	南区 SD2	弥生土器	壺				残 2.4	洗黄橙 10YR8/3	ナデ、柳指か?	砂粒多く含む	良好	
22-3	南区 SD2	弥生土器	壺	(15.0)			残 3.8	内におい裡 5YR6/3	へラ描直線文、刻目文	砂粒かなり多く含む	良好	
22-4	南区 SD2	土師器	壺				残 6.1	内赤裡 10R6/8 外におい裡 7.5YR7/4～明赤裡 2.5YR5/8	ナデ	精良	良好	
22-5	南区 SD2	弥生土器	壺				残 2.5	内におい黄橙 10YR7/2	柳指直線文、柳指波状文	精良	良好	
22-6	南区 SD2	弥生土器	壺	(15.6)			残 4.4	内におい裡 7.5YR7/4	柳指波状文、ハケ目、ナデ	精良	良好	
22-7	南区 SD2	弥生土器	高杯(脚)				残 4.6	灰白 10YR8/2	ハケ目	精良	良好	
22-8	南区 SD2	土師器	高杯(脚)				残 3.7	内におい裡 7.5YR7/4	ナデ	少量の砂粒含む	良好	

## 出土遺物観察表

図版 番号	地区名	種 別	器 種	法 量 (cm)				色 調	形態・技法・特徴	胎 土	焼 成	分 類
				口径	腹径	底径	器高					
22-9	南区 SD2	弥生土器	壺	(18.6)			残 6.7	内いぶい黄橙 10YR7/4 外灰 N4/0	ハケ目、ナデ、外面被熱	砂粒多く含む	良好	
23-1	南区 SD3	弥生土器	壺				残 2.2	内橙 7.5YR6/8 外明赤褐 2.5YR5/6	ナデ	φ 4 mm の砂粒含む	良好	
23-10	南区 SD3	弥生土器	高杯			(23.6)	残 3.9	灰白 5Y8/1	ヘラナデ、ハケ目	少量の砂粒 含む	良好	
23-11	北区 SD16	弥生土器	壺				残 1.05	内橙 7.5YR7/6 外明赤褐 5YR5/8	ナデ	精良	良好	
23-12	北区 SD16	弥生土器	壺				残 1.9	いぶい橙 7.5YR7/3	ヘラ指痕線文	砂粒多く含む	やや軟	
23-13	北区 SD16	土師器	壺			2.8	残 5.6	暗赤灰 7.5R4/1 ~ 橙 2.5YR6/8	ハケ目、ナデ	精良	良好	
23-2	南区 SD3	弥生土器	壺				残 2.3	内灰白 2.5YR8/2 外橙 7.5YR6/6	ハケ目、ナデ	精良	良好	
23-3	南区 SD3	弥生土器	壺	(15.8)			残 2.3	橙 5YR7/6	ハケ目、ナデ	砂粒少量 含む	良好	
23-4	南区 SD3	弥生土器	壺				残 4.3	いぶい黄橙 10YR7/2	タタキ目、指痕圧痕	精良	良好	
23-5	南区 SD3	弥生土器	壺				残 3.9	内灰橙 7.5YR5/2 外褐灰 7.5YR4/1	タタキ目、ナデ	精良	良好	
23-6	南区 SD3	土師器	壺	(12.6)			残 5.1	橙 2.5YR6/6	ナデ	少量の砂粒 含む	良好	
23-7	南区 SD3	弥生土器	壺				残 5.8	いぶい黄橙 10YR7/3	タタキ目、ナデ	精良	良好	
23-8	南区 SD3	弥生土器	壺				残 5.3	内いぶい橙 7.5YR6/4 外褐灰 7.5YR4/1	タタキ目	精良	良好	
23-9	南区 SD3	弥生土器	壺	(10.8)			残 8.5	内橙 5YR7/6 外淡赤橙 2.5YR7/3 ~暗灰 N3/0	ナデ、外面被熱	ごく少量の 砂粒含む	良好	

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	みなみたわらじょうりいせき だいじゅうじ
書名	南田原条里遺跡（第10次）
副書名	平成20年度町道中島井ノ口線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	福崎町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	7
編著者名	出田 直
編集機関	福崎町教育委員会
所在地	〒679-2280 兵庫県神崎郡福崎町南田原 3116-1 TEL0790-22-0560
発行年月日	2009年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみたわらじょうりいせき 南田原条里遺跡 (第10次)	ひょうごけん 兵庫県 かんきょうくんとくさくさきちゅう 神崎郡福崎町 みなみたわらあざなかしま 南田原字中嶋	28443	410046	34度 56分 34秒	134度 45分 24秒	2009.8 ～ 2009.10	387	町道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南田原条里遺跡 (第10次)	集落	弥生	溝・pit・築石遺構	弥生土器・石包丁	市川中流域で弥生時代中期初頭の遺跡が初めて確認された。

# 図 版



調査区遠景



調査前の状況



調査前の状況



作業風景



調査区 1



調査区 2

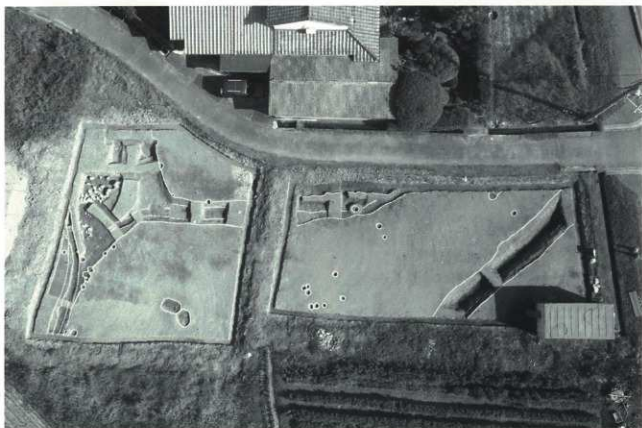


調査区 1 の様子





遺跡遠景



遺跡全景



調査前の状況



調査前の状況



作業風景



作業風景



作業風景



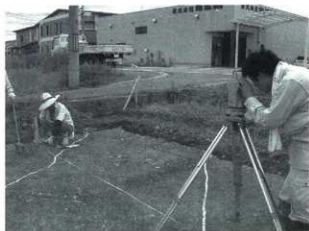
作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



作業風景



南区遺跡検出状況



南区遺跡検出状況



北区遺跡検出状況



北区遺跡検出状況



南区 SD1



南区 SD1土层



南区 SD2, SD3



南区 SD2, SD3土层



南区 掘立柱建物



南区 柱穴



北区 SD 22



北区 SD 22, SD 16 土层 (D-D')



北区 SD 16 土层 (C-C')



北区 SD 16 土层 (E-E')



北区 SD 21



北区 SD 21 土层 (F-F')



SX 24



SX 24



SX 24 遺物出土状況



SX 24



SD 16 pit 群



SK 18, 19





SD 1 遺物出土状況



SD 1 遺物出土状況



SD 1 遺物出土状況



SD 1 遺物出土状況



SD 1 遺物出土状況



SD 1 遺物出土状況



14-3



14-5



14-4



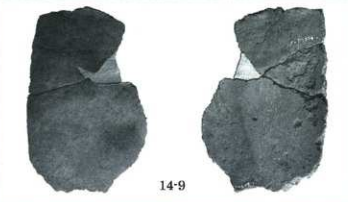
14-6



14-8



14-7



14-9



15-1



15-3



15-4



15-7



15-13



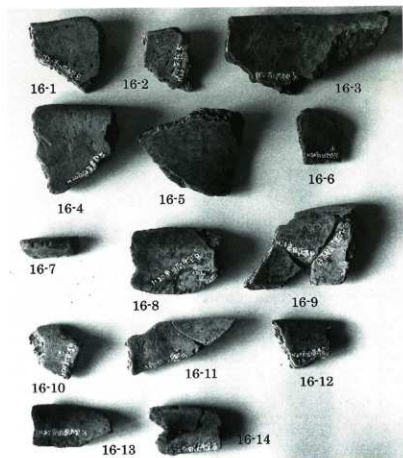
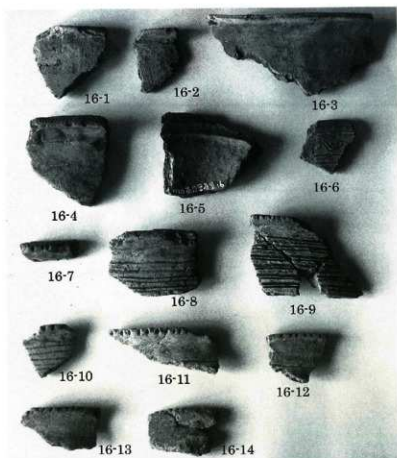
15-2

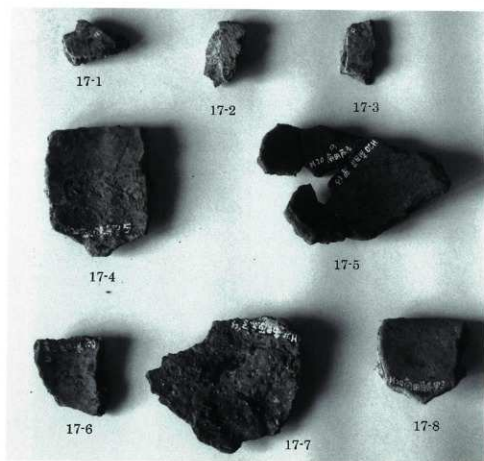
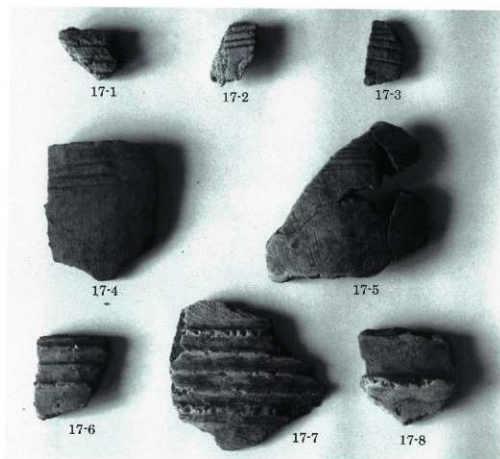


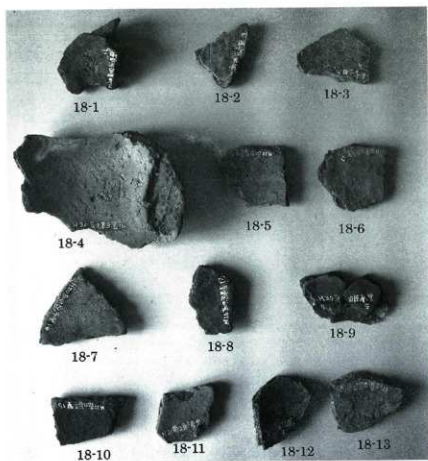
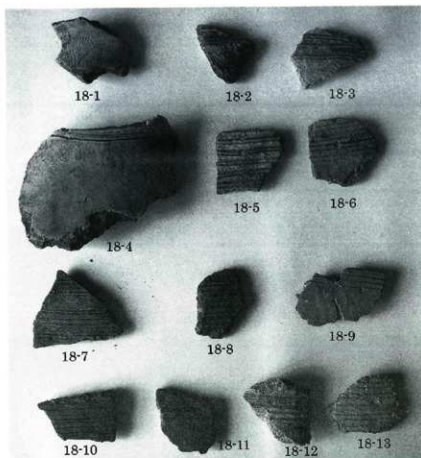
15-9

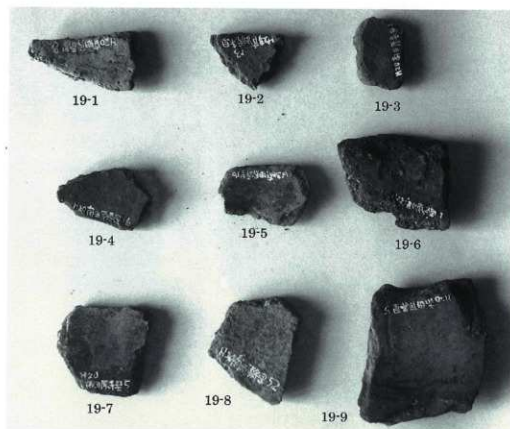
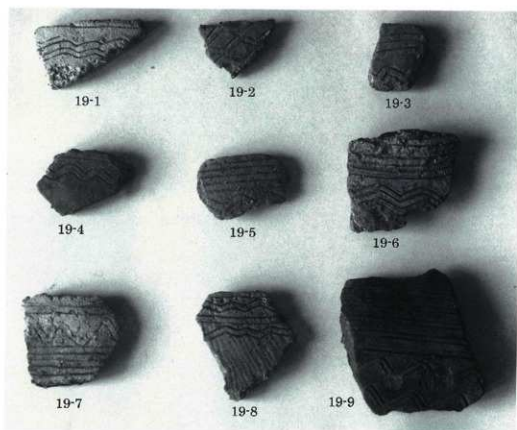


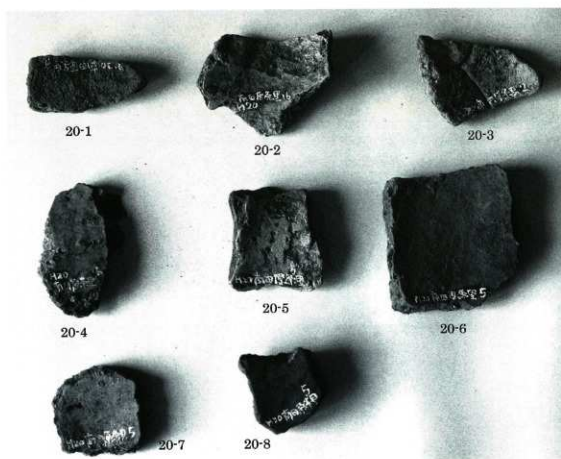
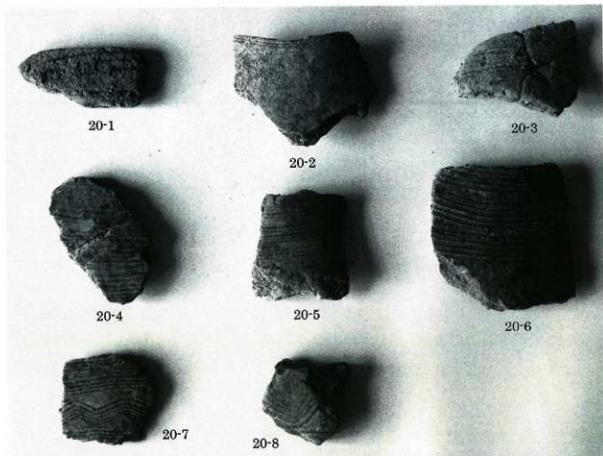
15-12















21-1



21-2



21-4



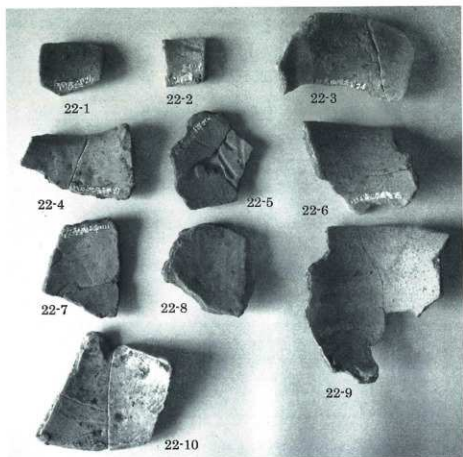
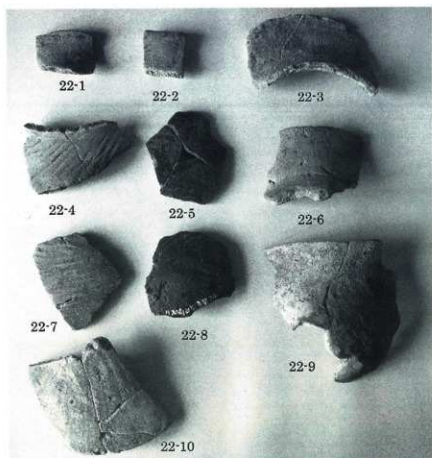
21-6

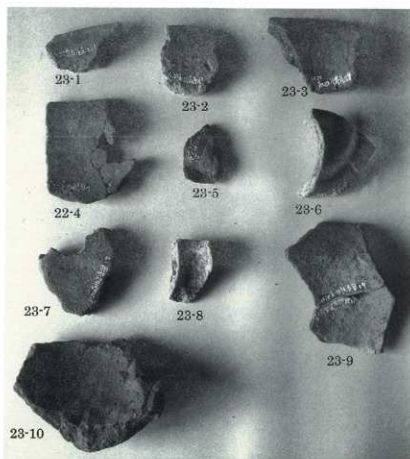
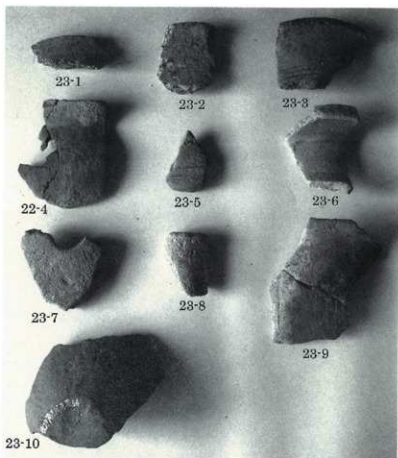


21-8



21-5





南田原条里遺跡 (第10次)

—平成20年度町道中高井ノ口線建設に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告—

平成21年(2009年)3月31日

編集発行 福崎町教育委員会

〒679-2280

兵庫県神崎郡福崎町南田原3116-1

TEL 0790-22-0560

印刷 井上印刷所

兵庫県神崎郡福崎町福田438-1

TEL 0790-22-0130

